

JOCV 千葉 OB 会報

2008 夏
2008 年 6 月
No.78

JOCV 千葉 OB 会

■ホームページ: <http://chiba-ob.jocv.net> ■発行責任者: 吉田憲司(青年海外協力隊千葉 OB 会会長)

1. 会長挨拶

今年も梅雨がはじまりうっとうしい日々が続いています。このような気候にも拘らず皆様にはますますご健勝にお過ごしのことと存じます。日ごろから協力隊活動を終えられてのOB会活動にご尽力頂き感謝いたしております。

さて、本年(平成20年)度の総会も、昨年に引き続きJR京葉線 新浦安駅駅前 プラザマーレ 2Fにあります「浦安市国際センター」にて4月12日(土)に開催いたしました。総会内容詳細は本会報に掲載させて頂いておりますのでご確認頂ければ、と存じますが昨年より協力隊を取り巻く環境が非常に激しく変化してきているように思います。

青年海外協力隊に参加後の千葉在住等の関係者で運営している私どものOB会ですが、昨年秋に開催県として旭市の飯岡社で実施した19年度協力隊OB会関東ブロック会議でも、いろいろ話題になりましたが、JICA・JBICの統合の行方や、昨年秋募集の応募者激減(最盛期の約半数に落ち込み、応募期間も初めて1週間ほど延伸)は皆さまもご存知のとおりです。

私どもの協力隊OB会も、今まで活動を卒業してきた協力隊の本体に対しあまりにも距離を置きOB独自の活動に至っていたのではないかと反省しています。もっと、現状の協力隊に対し直接的に何か出来ないのか?と考えさせられています。たとえば、協力隊に応募を考えている方々に対し、また、現在派遣されている千葉県出身の隊員の方々へ何らかのアクセスが出来ないものか?協力隊への応募促進につながる何かもっと直接的なことは出来ないのか?等考えると多々あります。私自身も協力隊に参加し、2年間も妻子をはじめ親族に対し迷惑をかけながら活動してきた何物にも変えがたい経験をさせて頂き、ぜひ今後に続ける努力は必須ではないか?と思っています。

総会の席でも発言させて頂きましたが、他主催の国際協力イベント等へ参加し協力隊PR活動を行なう必要性は否定しませんが、もっと直接的に協力隊本体に拘り協力隊活動を盛り上げていけるよう、努力をしていきたいと考えています。一案として、「聞こう、話そう、協力隊」というタイトルで実施している新帰国隊員の活動体験談の開催を増やし、より掘り下げた論議を通してのPRや、OB会直接の応募相談への取り組み強化、派遣中隊員への接触・支援の増進等に取組んで生きたいと思えます。

約1,000人を超える千葉県関連の隊員OBの方々のOB会へのご協力・運営への参加が、よりいっそう活発に頂けるよう取組んで参りますので、今後とも皆さまのご支援をよろしくお願いいたします。

会長 吉田 憲司(平成2年度1次隊 ボリビア 搬送)

目 次

1. 会長挨拶 吉田憲司
 2. 平成 20 年度総会報告
 3. 会費納入のお願い
 4. 2008 年 2 月～4 月 活動報告
 5. 帰国隊員活動報告
 6. 行事予定
- 資料 平成 20 年度役員名簿
資料 青年海外協力隊千葉 OB 会規約

2. 平成 20 年度総会報告

去る 4 月 12 日に開催された青年海外協力隊千葉 OB 会平成 20 年度総会について報告致します。

1. 日時: 平成 20 年 4 月 12 日(土曜日) 15 時 30 分～17 時 00 分
2. 場所: 浦安市国際センター
3. 議事:

平成 19 年度活動報告及び会計報告
 平成 20 年度活動計画(案)及び予算(案)
 質疑応答・意見交換

来賓

山田 久仁子 (千葉県環境生活部県民生活科青少年室)
 大塚 正明 (JICA 青年海外協力隊事務局)
 上野 嘉行 (JICA 地球ひろば地域連携課)
 木野本まゆみ (千葉県国際協力推進員)
 城島 理子 ((社) 青年海外協力協会総務部)
 田中 浩平 ((社) 協力隊を育てる会支援事業課)
 品川 洋之助 (千葉県シニアボランティアの会)
 梅谷 陽子 (千葉県シニアボランティアの会)

OV

吉田 憲司	2-1 ホリビア 搬送	玉城 均	9-3 マレーシア 造園
梶野 良夫	49-2 マラウイ 構造設計	田村 聖子	3-3 スリランカ 手工芸
稲葉 りか	12-2 フィリピン 養殖	伊東 宏一	43-3 インド 稲作
松山 文明	54-2 ザンビア 無線通信	寺木 茂	5-3 パナマ 建築
八木 宏文	2-3 モロッコ 電気工事	門間 通	49-2 エルサルバドル 体操競技
鈴木 由香	13-2 インドネシア 栄養士	東 国昭	43-3 インド 稲作
小松 秀世	43-3 ラオス 鉱物分析・地質調査	桜井 恵子	17-3 モルディブ 幼稚園教諭
森 永吉	62-3 ホリビア 野菜		

司会 : 田村 聖子

議長 : 稲葉 りか

平成19年度活動報告

月	OB会行事	共催	協力・参加	その他
4月	定例会(14日) 行事案内発行	協力隊まつり(21・22日)		↑ 春募集 ↓
5月	定例会(13日) 行事案内発行			
6月	定例会(9日) 総会(24日) 行事案内発行	1次隊壮行会(9日)		↑ エッセイ コンテスト ↓
7月	定例会(21日) 関東ブロック会議打合せ(29日) 行事案内発行			
8月	定例会(1日) 海外料理交流会(4日) 行事案内発行 会報76号発行			
9月	定例会(15日) 関東ブロック会議打合せ(16日) 行事案内発行	2次隊壮行会(15日)		↑ 秋募集 ↓
10月	行事案内発行		グローバルフェスタ(6・7日) エッセイコンテスト審査(13日)	
11月	定例会(10日) 行事案内発行		関東ブロック会議(24・25日)	
12月	定例会(15日)	ボランティア家族連絡会(2日) 3次隊壮行会(15日)		
1月	行事案内発行 会報77号発行 会報2008特別号発行(新春 交歓会OB会紹介用)		JOCA新春交歓会OB会紹介 (26日)	JOCA評議員会
2月	定例会(2日) 行事案内発行			
3月	聞こう話そう協力隊(1日) 定例会(15日)	4次隊壮行会(15日)	JOCAホスター掲示キャンペーン	

事務局長より平成 19 年度活動について報告があり、質疑応答の結果、承認されました。

平成19年度会計収支報告書

青年海外協力隊千葉OB会長様

収入の部

(単位:円)

項 目	金 額	内容説明
前年度繰越金	216,606	
年会費	118,000	
寄付金	117,182	
JOCA共同事業費(個別)	25,940	協力隊まつり
作業実施費	237,280	中学生エッセイコンテスト(一次審査)
JOCA共同事業費	600,380	通信費他
事業収入	36,340	グローバルフェスタ等売り上げ
雑収入	316	銀行利息等
合 計	1,352,044	

支出の部

(単位:円)

項 目	金 額	内容説明
活動費	16,436	平成19年協力隊まつり
活動費	1,050	平成20年協力隊まつり
活動費	140,796	中学生エッセイコンテスト
活動費	8,820	聞こう話そう協力隊(帰国隊員報告会)
活動費	14,755	グローバルフェスタ2007
活動費	111,538	派遣隊員壮行会
組織強化費	10,100	千葉県国際交流協会年会費
組織強化費	30,000	JOCA団体年会費
広報費	90,610	会報発行
会議費	144,615	定例会議・総会
会議費	144,328	関東ブロック会議
事務諸費	14,235	事務用品
雑費	720	国際交流会材料費補助
小 計	728,003	
次年度繰越金	624,041	
合 計	1,352,044	

上記の通り収支を報告します。

青年海外協力隊千葉OB会

平成20年3月29日

会計 梶野良夫

三菱東京銀行	3,102
郵貯銀行	31,031
千葉銀行	358,817
郵便振替	89,900
現金	141,191
計	624,041

会計監査報告

関係書類を監査したところ、
適正であった事を認めます。
平成20年4月1日

会計監査 田村 聖子

会計および会計監査より、平成19年度会計報告があり、質疑応答の結果、承認されました。

平成20年度活動計画(案)

月	OB会行事	共催	協力・参加	その他
4月	総会 行事案内発行	協力隊まつり		春募集
5月	定例会 行事案内発行			
6月	定例会 行事案内発行 会報発行	1次隊壮行会		エッセイコンテスト
7月	定例会 聞こう話そう協力隊 行事案内発行			
8月	定例会 海外料理交流会 行事案内発行			
9月	定例会 行事案内発行	2次隊壮行会		
10月	定例会 行事案内発行		グローバルフェスタ エッセイコンテスト審査	秋募集
11月	定例会 行事案内発行	ボランティア家族連絡会	関東ブロック会議	
12月	定例会 行事案内発行	3次隊壮行会		
1月	行事案内発行 会報発行		JOCA新春交歓会OB会紹介	JOCA評議員会
2月	定例会 行事案内発行			
3月	聞こう話そう協力隊 定例会 行事案内発行	4次隊壮行会		

事務局長より平成 20 年度活動計画(案)について説明があり、質疑応答の結果、承認されました。

平成20年度活動予算(案)

平成20年4月
青年海外協力隊千葉OB会
会長 吉田憲司

収入の部 (単位:円)		
項 目	金 額	内容説明
前年度繰越金	624,041	
年会費	120,000	
JOCA共同事業費	300,000	
作業実施費	200,000	中学生エッセイコンテスト(一次審査)
雑収入	55,959	
計	1,300,000	

支出の部 (単位:円)		
項 目	金 額	内容説明
活動費	50,000	協力隊まつり
活動費	30,000	グローバルフェスタ
活動費	100,000	中学生エッセイコンテスト
活動費	50,000	関東ブロック会議
活動費	25,000	ボランティア家族連絡会
活動費	10,000	JOCA新春交換会OB会紹介
活動費	20,000	浦安市国際協力フェスティバル
活動費	30,000	聞こう話そう協力隊(帰国隊員報告会)
活動費	100,000	派遣隊員壮行会
組織強化費	30,000	JOCA団体年会費
組織強化費	10,000	千葉県国際交流協会年会費
広報費	120,000	会報発行
会議費	200,000	定例会議・臨時会議
事務諸費	50,000	事務用品・各種連絡費
予備費	475,000	
計	1,300,000	

会計および会長より、平成20年度予算(案)の説明があり、質疑応答の結果、承認されました。

- 会計収支報告書の支出の部について、次年度繰越金の前に支出の合計欄を入れるべき(本会報には修正版を掲載)。
- 関東ブロック会議はどのような内容であったか → ① 関東ブロックとして始めてブロック推薦で選出した JOCA 担当理事を続けるための論議、② JICA・JOCA と各OB会との関係(活動資金等)、③ JICA・JBIC 統合と今後のボランティア事業の行方について、④ OB会としての JOCV 発足の原点に立ち戻っての今後の活動方向等を2日間で論議した。
- 定例会の会場について、千葉市でも行ってほしい。浦安市国際センターが会場確保の点で便利ということはわかるが、千葉県は広いので、浦安に行きにくい人もいると思う。
- OB会の活動が活発にならないとのことであったが、自治体や他団体等の行事に参加する形をとってもよいのではないか。(例: 九十九里浜を歩く会など)。
- OB会活動に参加できない理由として、仕事と子育てが忙しいことがあげられる。子供を連れて参加できる環境づくりや企画が必要なのではないか。
- 若いOBの方々に、ぜひ参加していただきたい。
- 常磐線周辺で何か企画したらどうか。その周辺にお住まいで、帰国後、間もないOBに、ある程度予算をつけて企画していただくなど。
- 名称を「千葉OB会」から「千葉県OB会」に変更したらどうか。その方が県の協力が得やすいのでは。
- 帰国隊員報告会を他組織とタイアップして、大掛かりに行ってはどうか。※帰国隊員報告会は「聞こう話そう協力隊」という名称で行っている。
- 帰国隊員報告会を、県の行事と併せて実施したらどうか。
- 帰国隊員報告会は、あまりかしこまった雰囲気でない方が良いと思う。お茶を飲みながらとか、民族衣装パーティーなども良い。
- 地区担当を置くべきだ → 地区担当のポジションはあるのだが、引き受け手がいない地区もあり、思うように機能していないのが現状。



3. 2008年2月～4月 活動報告

■ 聞こう話そう協力隊(帰国隊員報告会) 3月1日(土) 浦安市国際センター

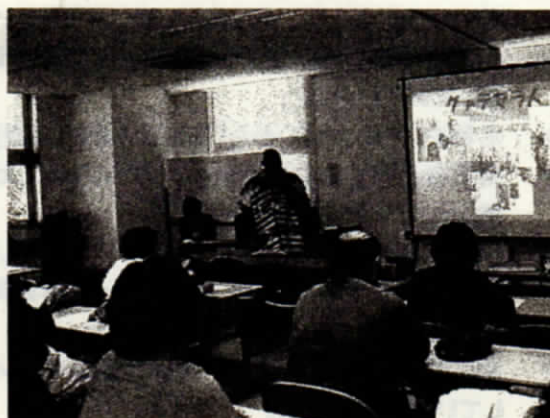
帰国直後の隊員 OB に、任地での生活・活動の様子を報告して頂きました。当日は一般の方以外に派遣中の留守家族の方にも参加して頂きました。

「東欧ブルガリア 協力隊事情・活動報告」 崎山篤 平成16年度2次隊 ブルガリア 公衆衛生

「グアテマラに派遣されて～2年間の協力隊体験」 吉川博之 平成16年度2次隊 グアテマラ 水泳

「ケニアの紹介と活動報告」 山下敏広 平成17年度1次隊 ケニア 理数科教師

「青年海外協力隊って何でしょう?!」 橋本麻衣子 平成17年度2次隊 ガーナ エイズ対策



■ 平成19年度4次隊壮行会(3月15日)・県庁表敬訪問(3月18日)

壮行会は7名の隊員と4名のOBに参加して頂きました。

石井 沙絵 トンガ 養護	中村 美紀子 ニカラグア 助産師
岩井 潮里 ボツワナ 栄養士	竹田 幸江 ボツワナ 栄養士
陶山 武嗣 中国 日本語教師	小坂 直 ケニア コンピュータ技術
楠田 知子 コスタリカ 環境教育	



■ 協力隊まつり 4月19日(土)・20日(日) JICA地球広場(広尾)

昨年に引き続き 協力隊まつりに参加しました。

今年は、千葉の地ビールと茹で落花生を販売しました。



4. 帰国隊員活動報告

あの日見た夢を追い求めて・・・ 青年海外協力隊員エルサルバドル柔道指導報告

17年度 3 次隊 エルサルバドル

下谷 英克

1、協力隊への志望動機

私は、小学4年から父の影響で柔道を習い始め、中学、高校、大学、そして1997年、千葉県警察官に拝命し、2005年までの8年間、千葉県警察柔道特別訓練員として全国大会初め各種大会に向けて優勝を目指し稽古に励んできた。この20年間どんな時でも常に夢は大きく持ち、その夢に向かって自分なりに精一杯努力してきたつもりだった。しかし、結局は納得のいく結果は出ず事が出来ずに、その夢は叶うことなく監督から肩を叩かれ現役を退く形となった。勿論勝負の世界、弱者は去らなければいけないことは重々承知だった。しかし、私自身このまま夢を諦めて次へ進むという事がどうしてもできなかった。また更には、ここまで柔道を続けてきて目標は勝負に勝つということを経験してきたわけだが、果たして柔道はそれだけなのであろうか？柔道とはもっと広く、もっと奥深いものではないののではないのだろうかという疑問も持ち始めていた。そんな中目に飛び込んできたのが、「青年海外協力隊」という募集であった。「これだ、これしかない、このチャンスを逃したら一生後悔する」私は、一度は諦めかけていた夢を海外の柔道家達ともう一度追い続けたい、柔道を外の世界から見つめ直してみたい、そういう思いで、職場、家族の理解を得て協力隊員へと挑戦する事が出来た。

2、青年海外協力隊員として

青年海外協力隊について簡単に触れておきたい。「青年海外協力隊」とは日本政府が行う行政開発援助「ODA」の一環として、外務省が管轄する、独立行政法人国際協力機構「JICA」が技術協力を目的として実施する、海外ボランティア派遣制度である。募集年齢は20～39歳までで、派遣期間は2年間、家族がいるとしても連れて行くことが出来ず、単身赴任としての派遣となる。では、技術協力という具体的な活動をするかというと、派遣された国(世界約80カ国)に現地の人々と共に生活し、現地の言葉を話し、相互の理解を図りながら、技術、知識を活かしながら発展途上国のよりよい国づくり、人づくりを目指していくものである。活動分野も多岐にわたり、農林水産、加工、保守操作、土木建築、保健衛生、教育文化、スポーツ、計画、行政の分野などがあり、約120の職種がある。そして、協力隊員候補生として合格が決まると約70日間の派遣前訓練が福島県(二本松市)長野県(駒ヶ根市)で、派遣国によって振り分けられ実施される。派遣前訓練とは、赴任国での公用語を集中的に学習するほか、協力隊員の理念、国際協力、異文化理解、赴任国事情の把握などを学び、充実したボランティア活動が出来る様に行われるためのものである。さて、隊員候補生として無事合格し、期待に胸を膨らませながら臨んだ長野県駒ヶ根での派遣前訓練ではあったが、その訓練は私の想像を遥かに絶するものであり、何と言っても辛かったのが語

学だった。私の派遣国エルサルバドルは言語がスペイン語なのだが、英語を除く他の隊員の派遣国の言語(フランス語、ベンガル語、シンハラ語、ウルドゥ語、ネパール語)よりかは比較的簡単とされていた。しかし、現実にはそんなことは一切なく、周りの人よりも何倍も記憶力が劣る私は毎日の授業時間(5時間)プラス、授業での宿題をこなす為にその時間より更に多い(5~7時間)の勉強時間を要していた。授業内容は本当にハードなものだった。しかし、それは当たり前の事である。何しろこのたった70間の訓練、そして、現地で1ヶ月の訓練を終えたら、派遣国で現地の言葉のみで2年間生活しなければならなかった。当然通訳など一切ない、危険な目に遭遇した時、あの単語一つさえ知っていれば命が助かったと言うケースも過去にあったという。訓練所長は、「言語は自分の命を救う為の最大の武器である」といつていた。本当にその通りだ。だから苦しい授業にも皆必死に耐えた。終了試験前に差し掛かった時には、隊員の中には授業についていくことが出来ず、泣き出す者も何人もいた。朝のランニングの時間、廊下ですれ違う時、風呂に入る時でも皆、経を唱えるかのように繰り返して口にして単語を覚えていた。一週間、派遣国の言語以外の言葉を口にしてはいけないという週もあった。スペル一字間違えて書いてしまっただけでも、「その一字を甘く考えすぎている、その一字間違えただけで全く意味が通じなくなるんだ!」と、先生に激怒されたこともしばしばあった。とにかくこれでもかと言うくらい語学では追い込まれた。そして、それだけならまだしも、毎週のように行われた予防接種(計10本)と、朝の急なアップとダウンしかない坂道3キロメートルのランニングが、毎晩寝不足で弱った体には容赦なく答えた。それでも、真夜中の休憩の一時、窓の外から眺める満天の星空を見上げては、エルサルバドルの柔道家達と稽古している事を常に思い描いていた。気がつけば、この過酷な訓練によって私の派遣国エルサルバドルに対する想いがより強く、確かなものになっていった。かくして、語学最終試験をクリアした私は、その10日後、2006年3月27日から2008年3月26日までの2年間、エルサルバドルでの生活をスタートする事となった。

3、エルサルバドル共和国

「エルサルバドル」という国名を聞いて、「あー、あの国か」とピンとくる人はどれ位いるであろう? 恐らくごく僅かではないであろうか。私自身も合格通知が届き任国「エルサルバドル」と書かれてあったのを見て、「一体何処の国だ! ここは?」と思ったのが正直な感想だった。職場の上司にも派遣国が決まりましたと国名を告げても、必ずといっていいほど次の日に返ってくる国名は「お前が行く国エクアドルだよな?」だった。そこで、この文を読んで頂いた機会にエルサルバドルという国を是非知って頂きたいと思う。エルサルバドル(正式名称 エルサルバドル共和国)はアメリカ大陸中央部(中米)に位置している国であり、その名前の意味はスペイン語で「救世主」と言われている。しかし、名前と裏腹に実に悲惨な歴史的な背景があり、1980年から1992年までの間には、内戦が行われ死者7万5千人を出し、2001年には大震災に見舞われ約千人もの命が失われた。

エルサルバドルの位置関係は、隣国が北西にグアテマラ、北と東にはホンジュラス、南と西には太平洋と面している。人口は、約687万人(2005年)、面積は、21,040平方キロメートルで日本の四国とほぼ同じであり、カリブ海諸国を除いては米州大陸国家では最小ではあるが、人口密度では米州最高を誇っている。地方行政区分は14の県に分かれている。首都はサンサルバドル県、私の2年間の活動はこのサンサルバドル県が主であった。日との時差はマイナス15時間、公用語はスペイン語で、宗教は伝統的にローマ、カトリックが主である。気候は熱帯気候であり、雨季(5月~10月)乾季(11月~4月)にはっきり分かれている。しかし、地域によって気温は大きく異なり、首都サンサルバドル県は海拔690mの高地にあり、年間を通じて低湿で湿りやすいのだが、海岸地方だと日本の盛夏のように蒸し暑い。首都に住むエルサルバドル人が地方都市を表す時のゼスチャーとして、額の汗を振り払うという仕草を見せるがそれも十分頷ける。食文化は、トウモロコシを中心としたものが特に多く、エルサルバドル発祥であり代表的な食べ物「プブサ」である。エルサルバドル風お好み焼きとでも言っていいたるだろうか、円形にしたトウモロコシの生地の中に、チーズや豚肉やフリフォーレス(小豆の甘さがないの)などを包み込み、熱したフライパンで焼き上げるといったものだ。しかし、帰国して2ヶ月経つが残念なことにこれと云ってエルサルバドルの料理が恋しいと感じたことはまだない...それから風俗、習慣であるが、スペイン統治から独立を果たしたラテン文化であり、いわゆる「ラテン気質」や「ラテン風」といったものを強く感じられるかとは思ったが、意外にもそれほどではなく、陽気度は他国に比べたら低い。しかし、音楽に合わせて自然に踊る姿はさすがに日本人では決してまねの出来ないものを感じた。それからエルサルバドルは中米国の中でも珍しく真面目で勤勉であり、他国からは「中米の日本」と言われているようだ。これは私自身の2年間の活動でも随所に頷ける部分があった。しかし、その一方で治安の悪さも感じざるを得ない。犯罪にあつては武装集団による店舗襲撃、強盗、殺人等の凶悪犯罪、または盗難、置き引きなど一般犯罪もとても多い。その中でも特に犯罪の中心となるのが青少年犯罪組織「マラス」の存在だ。青少年だからと言って甘く考えていたら大間違いだ。彼らは通常、特定のエリアに生活しているのだが、万

がいつでもこの集団に手食わしたとしたら無条件で彼らの指示に従うしかない。その場で何とかなると思い抵抗して逃げ切ったとしても彼らは必ず復讐してくる。現地警察官でも逮捕の時には必ず覆面をしている。彼らに顔を覚えられたら必ず復讐され殺されるからだ。私も今だからぞっとするが、けん銃で射殺された遺体を3回見た。どうみてもまだ犯行から間もない状況だ。しかし、何と言ってもその殺され方は本当に惨い。大体3発撃たれているのが多いのだが、その内の一発は必ず顔面に命中されている。つまり間違いなく殺すという意識で撃っているのだ。そういうこともあり、とにかく何処を見渡しても睨みを効かせて機関銃を構えている警備員、警察官があちらこちらにいる。いつ何があるか分からない状態だ、銃を手にして指は常に引き金に掛かっている。私も恥かしい話ではあるが、けん銃使用によるバス内での強盗の被害に遭遇してしまった。しかし、安全と言われている時間帯、場所だけであっただけにどうにも仕方なかったと言わざるを得ない。つまりこの国に住んでいる以上、安全なところなどどこにも無いのだ。また、仮に柔道5段、警察官という気持ちが働き、少しでも抵抗していたとしたら私の命は間違いなかったであろう。

4、エルサルバドル柔道家との出会い

3月27日にエルサルバドルに到着し、数日間の現地 JICA 事務所でのオリエンテーション、それから4月一杯の現地語学訓練を経て、いよいよ祈念すべき5月4日、職場であるエルサルバドル柔道連盟へとたどり着く事ができた。そして、いよいよ初日、扉を開け入った先には、目の前に「Bien Venido Profesor hidekatsu shimotani!」(ようこそ 下谷英克先生)と大きな字で書かれた幕が掲げられてあり、柔道連盟会長、ルイス、チェーベス氏を始め、各幹部一同約20人が平日にもあるにも関わらず集まってくれており、エルサルバドルの郷土料理で最大の持て成しを私の為だけにくれた。あの時の感動を私は生涯忘れる事はないであろう。そして翌日、早速選手との顔合わせをしてから稽古へと参加したのだが、まず初めの第一印象は、実力より何よりも皆、とても礼儀正しく、親切だった。おそらく、何を言っているのか良くわからないであろう私のスペイン語に対しても、真剣に耳を傾けてくれ、分からないことも優しく丁寧に教えてくれた。どんなに年配の指導者であっても私に対して常に敬意ある態度で接してくれた。これはひとえにエルサルバドル柔道家の柔道に取り組む姿勢はもとより、歴代隊員による指導の成果の賜物ではないかと感じ取る事ができた。日本でのエルサルバドル柔道に関する調査票では歴代隊員は私で3代目となっていたのだが、この国に来て分かったことだが、エルサルバドル柔道隊員はもう私で12代、歴代隊員がここまで築いてきたことを崩すことなくしっかりと引き継いでいこうという使命感を感じると共に、心から柔道を愛する仲間と出会い、そして、これから2年間を共に出来る事への最高の喜びを私は噛み締めていた。それから一つエルサルバドル柔道にはこんな礼法の流れがある、それは稽古の最後、通常なら上座、先生、お互いにとれをして終了するのだが、エルサルバドルにはもう一つある。それはその後で指導者、選手含め全員一人一人が握手を交わして終了するのだ。この握手というのが実に意味があり、私がいい指導、いい稽古を選手がした時には力強い握手が交わされるのだが、私に怒られたり元気がなかったりすると軽い握手しか返ってこない。この握手によって選手の状態が把握出来るのだ。こうした何気ない事ではあるかもしれないが、このことによってお互いの稽古の成果を称えあっている事が良く伝わり、柔道の創始者、嘉納治五郎師範の説いた「自他共栄の」精神に当てはまるのではないかと私自身も大変感心させられた。私はこの握手の時が何よりも好きであり、この国に来て良かったと実感できる瞬間でもあった。

5、柔道を伝え JUDO を学ぶ

エルサルバドル柔道連盟は1967年設立、この国に柔道を始めて普及したのは韓国人の指導者だった。それから2年後の69年に日本から協力隊、初代柔道隊員が派遣、内戦で一時派遣は中断したものの、終了してからは復帰、派遣は継続されてきた。しかし、その間に、日本以外にもブラジル、スペイン、キューバからの指導者を呼び、分散して柔道の普及、強化に努めてきた。なので、柔道についての知識も年配の指導者は私よりも知っていることが多々あった。だが、これだけ様々な国の指導者からの手ほどきを受けてきたのだ、同じ柔道といえども、国によって柔道に対する考えは全く異なってくる。ということは、それを学んだエルサルバドル柔道家にも考え方がそれぞれの指導者によって微妙にずれている事が多々あった。なので、私はこういうことも踏えた上でもこれから柔道を指導していかなければならなかった。協力隊柔道隊員は派遣前に語学訓練とは別に、講道館(*柔道の総本山、教育機関)にて技術補完研修というものも1ヶ月間受けるのだが、その時に海外で指導するに於いての注意すべき点として、柔道は日本発祥のものであるが、「日本」ということをあまり全面に押し付けてはいけないということを強く言われた。よって、日本柔道の教科書そのもののものをそのまま彼らに指導しても伝わりにくいということを前提に、エルサルバドル改訂版に分かりやすく噛み砕いて教科書を作り直すことが私の役割だと解釈した。その為にも、彼ら

をこれから指導するにあたって、エルサルバドル柔道が現在に至るまでどういう経緯を辿って柔道スタイルが確立されたのか？それによつての長所は？短所は？課題？更に柔道を離れてみて、エルサルバドル人の特徴に着眼点を置き、体系、骨格、筋肉のつき具合、性格、習慣、文化、癖など、とにかく様々な視点から見て、どういった指導方法が彼らに的確に伝わるかをまずは考えた。そして、同時に私自身もエルサルバドル「JUDO」の良い所は積極的に受け入れていこうという柔軟さを持ち、そのことを日本柔道に活かせればということも考えていた。

6、無我夢中の7ヶ月間

私の2年間の活動場所は大きく3つに分けられる。まず、一つは首都サンサルバドル県で、一般の少年から大人を対象とした一般クラスの指導。2番目に地方都市、サンミゲル県で同じく一般の少年から大人を指導。最後に、再び首都サンサルバドル県で今度は少年から成年までのナショナルチーム(国代表チーム)の指導を担当した。最初の私の指導は、2006年5月から8月までの3ヶ月間、サンサルバドル県で、少年から大人までの一般生徒対象としたクラスからのスタートだった。ここでは、現地指導陣も充実していた為、私は主に現地指導者のサポート的役割をしていたのだが、前記した通りエルサルバドル柔道にあった指導方法とは何かということも常に模索してきた。しかし、実際の所その答えをたった数ヶ月で導き出すには余りにも無理があった。なので、とにかく稽古の時でもそれ以外の時も常にエルサルバドル人と会話を絶やさず、また口先だけの指導にならないよう、自ら先頭に立ち、共に同じメニューをこなす、多少の間違いも恥じることなく全力でぶつかっていく姿勢に徹した。その甲斐あってか、少しずつ彼らとのコミュニケーション、信頼関係も築いていくことができ、出だしの首都での指導はますますといった滑り出しとなった。しかし、次の2番目の活動場所サンミゲル県、この地での活動が、私にとっての最初の大きな試練となった。

8月から12月までの4ヶ月間は、エルサルバドル第3の都市と呼ばれるサンミゲル県での活動となったのだが、この地で未だかつて歴代協力隊員は指導したことがなく、過去にキューバ女子五輪メダリストが指導していたという。さて、そんな事もありどんな柔道家と出会うことができ、どんな柔道をするのか非常に楽しみであったのだが・・・そこで見たものとは柔道というものを遥かに通りこした、お遊び教室の場だった。本当にそれは酷く、お粗末なもので、柔道場として量はあるものの、そこで行われている大半の時間は柔道以外のサッカーがメイン。しかも土足で駆けずり回っているため、量はひどく傷み、床底が抜けている箇所もいくつもあった。そして、ようやく柔道に移ったと思っても、それは名ばかりで、準備体操、礼法、受身など殆どない。あるのはごく僅かな打ち込みと、立ち技の乱取り稽古らしきものだけだった。しかも、アクセサリもジャラジャラと身に付けて、ガムをクチャクチャと噛んでいるというのは当たり前という始末、もう無法状態だった。「これが本当に柔道なのだろうか？」私自身も柔道とは何なのか見失いそうにもなった。こんな状態で、「一体これからどうやって指導していけばいいのだろうか？」正直やっていけない自信が持てなかった。翌日、私は何はともこの汚れきった道場を何とか綺麗にしなければと思い、まずは彼らと共に柔道場の大掃除からスタートした。意外にも初めのうちは私に対して人見知りをしていることもあったせいか、掃除も皆、指示した通りに、一生懸命やってくれた。そんな姿を見て、私は掃除をやりながらこんな問いかけを試みた。「柔道好き？どこが好きなの？」と、そうすると最初の内は皆照れてはいたものの、「凄く楽しくて好き」「ナ達も沢山出来た」「習った技が決まった時の感触が忘れられない」と、彼らから意外と言っては失礼だが、嘘偽りの無い素直な答えが返ってきた。ハッと、私はその時大切な何かに気がついた気がした。「そうだ、彼らは柔道が本当に好きなんだ。でもその好きな柔道を彼らは正しく指導を受けることが出来ず、誤った方向で理解してしまい、ここまで来てしまったんだ。」と。それから、私は生徒は勿論、現地指導者にも、柔道の意義、心得から分かりやすく0から指導していった。しかし、好きな柔道といえども、遊び感覚の柔道から一変し、規則や決まりが多く、礼儀作法、受身、打ち込みの基本を重視した練習方法には、頭ではその大切さには分かっているものの、面白みに欠け、すぐに飽きてしまう彼らには受け入れてもらうことは中々難しく、次第に練習に来なくなる生徒が多くなっていき、気がつけば50人前後いた生徒が10人台までに減少してしまった。私も何とか試行錯誤しながら、楽しめる柔道をと心掛けていったのだが、一度離れてしまった生徒が再び来ることは中々なかった。次第に私自身も指導に対する自信を失いかけて、スペイン語での会話もストレスとなっていき、口数も少なくなっていっていった。また、私生活でも、私を受け入れてくれていたホストファミリーとの間で、トラブルが生じ、関係もうまいかなくなっていた。それらの事も重なってか、原因不明の体調不良、デング熱にもかかり、体重もここへ来た当初から16kg減ってしまっていた。心身ともに疲れ果て毎日が本当に辛く苦しい孤独との格闘だった。しかし、そんな中でも、気持ちを切らすことなく指導してきた成果が少しずつ伝わってきたのであろうか、3ヶ月が経過した辺りから生徒にも変化が見え始め、生徒の数も少しずつではあるが増えてき始めた。ようやくであるが、かすかな感触を掴み始めかけてきた。そんな最中、時期に事体は思わぬ方向へ急展開、連盟からの以降で、再びサンサルバドル県へ、今度はナショナルチームのコーチ

担当としての抜擢となった。サンミゲル県での4ヶ月間、ここでの思い出はいいことよりも辛いことの方が遥かに大きかったが、この経験が、私にとって今後のナショナルチームでの指導に大きく役立つ事になった。

7、世界を目指して！

2007年1月、気持ちも新たに私はナショナルチームを担当する事となった。エルサルバドルのナショナルチームのレベルは、中米ではここ数年ナンバーワンの座を保持してきたものの、アメリカ大陸全土のレベルで見ると、世界でもトップレベルを誇る、ブラジル、キューバを始め、アメリカ、カナダ、アルゼンチン、ベネズエラなどの強豪国がひしめく中を勝ち抜くには、まだまだレベル的にはかなり厳しい状況にあった。しかし、2007年は連盟としても非常に重要な年と位置付けられており、7月には、4年に一度行われるパンアメリカン競技大会、9月には世界選手権（共に開催地、ブラジル、リオデジャネイロ）と、重要な大会が目白押しで、これらの大会の成績は全て2008年北京オリンピックへの選考も兼ねてある大会となっているということもあり、会長を始め連盟全体もこの年に賭ける意気込みはとても強く、私への期待も非常に大きかった。そして、それらの対大会に勝つための練習メニューの新しい考案は、会長自らも計画に加わり、早朝5時半～7時半（柔道、打ち込み中心）7時半～8時半（トレーニング）、午後4時～5時（研究 主にビデオで）5時半か～7時半（柔道 乱取り中心）と、大学生が大半の選手達は、授業の時間を除いては、食事と睡眠以外はほぼ稽古というとてもハードな内容と仕上がった。また、練習相手もどうしても少ない為、マンネリ化してしまうこともあるので、週末には、恵まれた自然を最大限に利用して、高地や海辺でのトレーニングで徹底的に基礎体力を図った。休みは唯一、月曜日の朝練習が無い位だった。それでも、ナショナルチームの練習時間としては短いと思われるかもしれないが、選手の中には片道1時間半かけて道場に来る選手もいれば、夜は治安がとても悪い為、7時半までの練習時間が精一杯出来るギリギリのラインだった。そして、この練習内容を1月から3月までの試合までの準備期間、彼らは精一杯の努力を見せてくれた。私もそんな彼らの頑張りに対する為に、スペイン語での交換日記で、彼らの精神面のアドバイスをしたり、アメリカ大陸各国の柔道スタイルも全くといっていいほど知らなかった為、選手達と過去の対戦試合、データを参考にしながら対策を練り研究をしたりと、手探りの状態の中から出来る限りのことはしてきた。そして、迎えた4月、シーズン第一発目となる中米大会、もう、中米レベルの大会は、軽く優勝して次に繋げていきたいと思っていたのだが、結果は、まさかの敗退で数年ぶりに2位に甘んじてしまうという結果となってしまった。しかし、気を取り直し5月のアメリカ大陸大会、レベルからしても中米大会とは比べ物にならない規模の大会ではあったが、今度こそ稽古の成果を発揮してくれるだろうと思ったのだが、7選手出場して、挙げた勝利は、不戦勝を含めて僅かの3勝という形で終わってしまった。コーチとして就任してから僅か5ヶ月足らず、たったそれだけの期間でいい成績を残せるほど勝負の世界は甘くないとは思っていたのだが、それでも、ただただ悔しい気持ちで一杯だった。それは選手も当然同じ気持ちだったとは思ふ。しかし、その一方で、この大会なのだから負けるのは仕方がないという、半ば諦めかけている気持ちがあったのも事実だった。それは、柔道の実力の差ということだけではない。もっと大きな、国と国との規模の差を感じざるを得ない気がしたからだ。でも、私はそのことをいい訳に彼らに諦めてもらいたくなかった。例えどんなに厳しい環境にあったとしても、どんなに苦しい局面にあっても、自らの手で、やれば出来るということを証明して欲しかった。勝って、エルサルバドルと言う国を誇りに思ってもらいたかった。私はこの時、協力隊の枠を超えてでも必ず彼らを勝たす。そう心に決めた。

8、奇跡の快進撃！

5月のアメリカ大陸大会が終わり、敗戦に沈む余裕も無く、次の大会、パンアメリカン競技大会の最終選考会はまだ目の前に迫っていた。大会までの期間は僅か2週間弱、これだけの期間で劇的に技術が進歩するはずはない。私は選手達が最高の状態で試合に臨めるよう、気持ちの引き出しを最大限に引き出すことに尽した。そして、迎えた大会、エルサルバドルの快進撃はここから始まった。大会に5名が出場した中で、激戦を勝ち抜き、4名の選手が本戦出場の切符を手にした。更に本番7月に行われたパンアメリカン競技大会 柔道競技においては、男子-81kg級 フランクリン選手が、アテネ五輪銅メダルを下し、見事今大会で銅メダルを獲得し、エルサルバドル柔道史上初の快挙を成し遂げたのだ。あの敗戦から僅か2ヶ月、本当にそれは今の實力では奇跡に近いものがあったと思うが、彼にはそれを裏付けるだけのものは確かにあった。ここで少し彼について触れたいが、彼の家庭は決して恵まれてはいなかった。大学生である彼は家計を支える為にアルバイトを1箇所では不足2箇所ですていた。言うまでもなく、練習はあの内容だ、当然、体も限界になる。彼の練習での口癖はいつも「もう、疲れて限界です」だった。本当にそうだ。普通の人間ならあのノルマをこなしていたら当に体を壊しているに違いない。私もそんな彼をみて、何も言うことが出来なかった。今まで恵まれた環境の中で何不自由なくたぬくぬくと柔道をしてきた自分に何が言

えるだろうか？言えるのはただ、「頑張れ」それだけだった。そんな彼の頑張りは柔道連盟を動かした。彼は実力が十分あるにも関わらず疲労で試合に力が発揮できない、彼が万全で望めるよう彼の援助を少しでも連盟がしよう。彼は柔道に専念できるだけのエネルギーを持つことが出来たのだ。しかし、彼は勝って結果を出しても決して奢ることなく、謙虚で、皆への感謝の気持ちを忘れてはいなかった。「メダルを取れたことは嬉しいです。でもこれは自分一人で取れたものではありません。エルサルバドル柔道家、皆で勝ち取ったものです。それにもうこれは過去の物、世界でのメダルが欲しいです。」彼はこう言ったのだ。私はこの事が、涙が出るほど嬉しかった。柔道だけでなく、人間としてこれほどまでに成長してくれた事が何よりもうれしかった。この大会から2ヵ月後の9月、世界柔道選手権大会(ブラジル リオデジャネイロ)にはフランクリン選手を初めとする(男子2名、女子2名)計4名が出場。結果を一括りに言ってしまうと全くだったのかもしれないが、皆大健闘したといえる。特に女子、-48kg級スレイマ選手は1回戦で強豪中国との対戦、ポイントこそ取られたが5分間戦い抜いた。男子-66kg級、カルロス選手、そしてフランクリン選手、共に1本勝ちで世界1勝を挙げた。間違いなくそれぞれが次に繋がる大きな手ごたえを掴んでくれたのではないかと私は感じた。そして・・・2008年5月、私の活動は3月で終了となっていたが、北京オリンピック代表には、フランクリン選手が出場決定となった。私としては当然世界選手権に出場した4選手全員にチャンスがあっただけに決めて欲しかったのだが、まだそこまでは現実には甘くないということも言えるのだろう。しかし、フランクリン選手一人とはいえず、この舞台への挑戦を精一杯努力してもらいたいと同時に私自身も、日本で出来ることを少しでもサポートしていければと思っている。

頑張れ！ フランクリン！！

9、人生の金メダルを目指して

2008年8月、北京オリンピックは訪れる。私もこの夢の舞台に監督として立ちたかったということは正直なところだ。しかし、活動期間が2年と決められている以上それは承知のことだから仕方のないことだと言うことも分かっている。それでも、3月24日をもってお預けになった夢を諦めるつもりはない。必ずいつの日か今以上の知識を蓄え、経験を積み戻ってくるつもりだ。だが、この活動期間、私はオリンピックの為だけを目指し、走り続けてきたわけではない。その先の大きな勝利に向かって走り続けてきたつもりだ。だから、勿論金メダルを目指し一生懸命頑張ってもらいたい。それが全てではないんだという事を言いたい。仮に、オリンピックでフランクリン選手が金メダルを獲得したとしたらそれが彼の柔道家としての全てであろうか？私はそうは思わない。なぜならば、その先にも柔道家として歩んできた以上、道はあるからだ。むしろそれから先、柔道を終えた後の人生の方がエルサルバドルの柔道家達にとっては辛く険しい道のりが幾多も待ち受けているからだ。その時、私はこの柔道を通じ学んできた事を思い出して欲しい。この量で磨いた精神を、この量で養った魂を・・・そして、また、彼らに再び逢いたい。彼らがどう成長したのかを。そして私自身も彼らの成長に恥じないように。オリンピックの先にある人生の金メダルを目指して。

最後にこの活動に際しご尽力頂いた、職場、講道館、全ての皆様に心から感謝し、2年間の報告としたい。



大会2007 世界柔道 選手 会長と

